

ユナイテッド93

2006(平成18)年9月15日鑑賞(OS劇場)

★★★★



監督・脚本・製作＝ポール・グリーングラス／出演＝J.J. ジョンソン／デイヴィッド・アラン・ブッシュ／ハリド・アブダラ (UIP 配給／2006年アメリカ映画／111分)

……「あの戦争」が戦後61年を迎えて風化し、1995年1月17日の阪神・淡路大震災が風化していくのと同じようには、2001年9月11日のアメリカ中枢部を襲った同時多発テロの風化は許さない！ そんな決意を感じさせるポール・グリーングラス監督の「ドキュドラマ」のインパクトは大きく、映画という芸術のすばらしさを再認識させるもの。とりわけ、日本人にはハイジャックされた4機のうちの1機「ユナイテッド93」の動きは謎に包まれた部分が多いだけに、この映画の衝撃は大きく、さらなる調査が望まれることを実感！ 10月に公開される『ワールド・トレード・センター』も、これと対比して是非鑑賞しなければ……。

4機目がユナイテッド93便

ここで詳しく9・11の様子を再現するつもりはないが、「あの日」ハイジャックされたボーイング機は計4機で、①最初にアメリカン航空11便がワールド・トレード・センター(WTC)北棟に激突、②次にユナイテッド航空175便がWTC南棟に激突、③3番目にアメリカン航空77便が国防総省ペンタゴン本庁舎に激突した。

そして4番目がハイジャック犯4人を含む乗客乗員44人を乗せてニューアークからサンフランシスコへ行くユナイテッド航空93便で、ハイジャックされた後、進路を首都ワシントンに向けて航行中、ペンシルベニア州シャンクスヴィルで墜落した。2006年8月3日付産経新聞の中田雅博氏によるこの映画の紹介記事によれば、「その現場から首都ワシントンまでは240km。ジェット機でわずか10分以内

の距離だった」とのこと。

出演者たちは……？

10月に公開される『ワールド・トレード・センター』はニコラス・ケイジ主演の映画だが、この『ユナイテッド93』には主演スターは存在しない。ユナイテッド93の乗客乗員44名は全員死亡したが、パンフレットにはハイジャック犯以外40名全員のプロフィールが遺族の言葉を基に綴られている。

そして出演者は、この40名の性別・年齢を反映して、一般的にはあまり知られていない俳優たちが選ばれ、また実際のパイロットや乗務員の経験を持つ人が選ばれたとのこと。

さらに、事件当日に連邦航空局（FAA）に着任したばかりのベン・スライニーは、当初顧問として映画製作に参加していたが、最終的には現実にその役で出演することになったとのこと。

したがって、慌ただしく動く管制塔の様子はリアルだし、彼がこれ以上の被害拡大を防ぐために、全米で飛行中のすべての飛行機の即時着陸を命令した時の緊張感もすごいもの。

他方、セリフは少ないものの、最初から緊張感いっぱいの4人のハイジャック犯たちが、必死にその任務を遂行しようとする姿も観客の立場からはよく理解できるもの。演技の枠を超えて伝わってくるスリルは、まさにドキュメントタッチ……。

これぞドキュドラマの最高峰！

ドキュドラマとはドキュメンタリーとドラマを融合させたもので、実際に起こった事象をドラマとして再構築するもの。一般にドキュメンタリー作品を得意とする監督たちは、当然このドキュドラマも得意。近時日本で話題になったドキュドラマが『蟻の兵隊』（05年）で、これは日本軍の山西省残留問題を題材としたもの。

ドキュメンタリーにしてもドキュドラマにしても、その成否はテーマとするものがよく知られている事象かどうか大きいのが、それは、観てみようという興味

を持つかどうかには大きな影響を及ぼすから。その意味では日本軍の山西省残留問題と9・11テロでは、その事象についての国民の認知度が大きい。

他方、いくら認知度があっても、その事象の「料理の仕方」が悪ければどうしようもないが、『蟻の兵隊』の池谷薫監督と同じくこの映画のポール・グリーングラス監督の力量は折り紙付きで、この映画の緊張感は相当なもの。

それについては、2006年8月15日付産経新聞（夕刊）の福本剛氏によるこの映画の解説に、「変な言い方だが、こんなに疲れる映画は珍しい」と書かれているほど……。

映画前半の管制塔を中心とした瞬時の情報収集と整理そして決断という作業のくり返しは、2001年9月11日に現実展開されたものを忠実に再現しようとしたものだけにリアル感があるし、後半のユナイテッド93便内部での乗客による「決起」は、ハラハラドキドキ、手に汗を握るドラマとなっている。そしてやっと、乗客たちがコックピット内に突入し、犯人たちから操縦桿を奪い取ったにもかかわらず機体は……？ これぞドキュドキュドラマの最高峰！

映画検定4級の知識を少し……

今年6月25日に実施された第1回映画検定で4級に合格した私が、『映画検定公式テキストブック』から学んだ知識によれば、1895年12月28日にパリのグラン・カフェの地下にあるサロン・インディアンでシネマトグラフが有料で上映されたのが、映画の「世界上映第1号」。

ここで上映されたのは、アントワーヌ・リュミエールが撮影したシオタ駅に列車が到着するところを撮った『列車の到着』の他、『海水浴』『赤ん坊の食事』など10本。

パンフレットにある、わたなべりんたろう氏（ライター）の「ポール・グリーングラス監督のドキュドキュドラマの考察」は、『列車の到着』における、「動く蒸気機関車が自分たちの方向に走ってくる映像に、当時の観客は驚愕し、悲鳴をあげる人や逃げ回る人まで出たと言われている」と書いている。

そんな、わたなべりんたろう氏が、「このように、映画本来が持つ力を凝縮したのが『ユナイテッド93』なのである」と述べているのは興味深い、この解説

を読んでも、映画をホントに理解するためには勉強にもとづく映画の知識が不可欠なことをあらためて実感……？

「決起する乗客たち」はさすがアメリカ人……？

「決起する乗客たち」という小見出しは、悲劇的な結末となったユナイテッド93便の乗客たちを茶化するものではなく、逆に日本人乗客ではここまで闘争本能(?)に火がつかず、「決起」すること自体が難しかったのではないかと思ひ、決起したアメリカ人たちを讃美するもの。

自分の乗ったジェット機が突然ハイジャックされたとわかった時、すべての乗客に走るのは恐怖心のみ……。

また、犯人たちは乗客たちの恐怖心を煽るかのように時々威嚇的な行動を示すうえ、最初に喉を掻っ切られて犠牲となった乗務員の姿が乗客たちの目に焼きつけられているはず……。

そりゃ理屈から言えば、犯人が身につけている爆弾はニセモノかもしれないし、乗客の方が多数であるうえ、犯人たちの武器はナイフだけだから闘えば勝てる可能性はあるだろうが、問題はそんな机上の空論ではなく、機内にいる恐怖に脅えきった乗客たちがそんな気持ちになれるかどうかということ。

この映画で観る限り、乗客の中の屈強な男たちを中心として「決起部隊」が結成され、そのための情報の伝達や武器の準備その他必要な処置が、乗客たちの手によってテキパキと進められていく姿は実に感動的！

今ドキの軟弱な日本人たちではこうはいかず、ただ己の不運を嘆いたり、「この責任は誰にあるんだ、何とかしろ」などと「ないものねだり」をしたりという体たらくに陥るのではないかと思うだけに、決起を決意した乗客たちにはほとほと感心。

彼らがすべてアメリカ人であるわけではないが、そこにアメリカ人のフロンティア精神や自立心を見たのは私だけ……？

最後に伝えたい想いは……？

この映画の1つの見どころは乗客たちの決起だが、もう1つの見どころは、突

然人生の終焉状態に追い込まれた人たちが、機内の電話や携帯電話を通じて、最も大切な人に伝えたい想いとは一体何なのだろうかということ。

犯人に見つからないように注意しながら機内の電話を使うことによって、妻に飛行機がハイジャックされたことを警察に通報するよう伝えたり、逆にニュースでWTCにハイジャック機が激突したことが報道されていることを知らされたりという大切な情報の伝達をしている姿は貴重なもの。しかし、個々の乗客にとっては、そんな全体的な情勢よりも、自分にとって最も大切な人に最後の想いをどう伝えるのかの方が重要なはず……。

スクリーン上で描かれるそんな乗客たちの姿は、犠牲者の遺族たちからの聞き取りを基とした生々しいものだけに、それぞれ涙を誘うもの。そのほとんどは「愛してるよ」というものだし、「愛していると伝えてくれ」というもの。

イスラム教徒たち、ハイジャック側の主張も全然わからないわけではないが、少なくとも、こんな普通の乗客たちを犠牲者にする権利はアラーの神も与えていないのでは……？

小泉内閣の登場と小泉退陣と軌を一に……？

9・11テロが発生したのは、小泉内閣が登場した2001年4月からわずか5カ月後なら、参議院で郵政民営化法案が否決された小泉総理の決断によって衆議院が解散され、総選挙が実施されたのは、くしくも2005年の同じ9月11日。そして、小泉総理の2006年9月の退陣と軌を一にするかのように公開されたのが、9・11テロを真正面から取りあげて映画化したこの『ユナイテッド93』。そして10月には続いて『ワールド・トレード・センター』も公開される。

私は愛媛大学法文学部の都市法政策の集中講義を、1999年、2001年、2003年、2005年と過去4回行ってきたが、その中で学生たちに熱く語ったのが小泉改革の意義。そのテーマは、官から民へ、都市再生、道路公団民営化、郵政民営化など国内問題が中心だが、小泉総理とブッシュ大統領とのきわめて親密な関係とこれにもとづく日米同盟の強化は、小泉外交の大きな特徴。そんな小泉改革が始まった途端に発生した9・11テロが、小泉退陣とともにこんな形で映画化され、「総括」されるのも何かの縁……？

風化させないことが大切！

昨年2005年は、あの戦争からの「戦後60年」だったし、1995年1月17日の阪神・淡路大震災から10年という記念すべき年だった。広島と長崎の原爆死没者慰霊祭も毎年開催されているが、次第にその被害を語り継ぐ人が少なくなり、風化していることは厳然たる事実。

年月の経過とともに昔の記憶を消していくことも人間が生きていくための1つの知恵だが、やはり風化させないことが大切。

今年9・11テロから5周年を迎えたアメリカでは、さまざまな記念行事が開催されたが、グラウンドゼロからの新しいビルの建設はこれから。そして、9・11テロを契機として開始されたアフガン戦争、イラク戦争のケリは未だついておらず、ブッシュ政権はこれからもいばらの道が続く様子。アメリカにとっては、1941年12月8日の日本軍によるパール・ハーバーの襲撃は、「リメンバー・パールハーバー」として強く国民の記憶に残り日本軍と戦う原動力になったが、さて2001年9月11日の同時多発テロも記憶はいつまで……？

そして、アメリカ流民主主義とイスラム諸国との和平は、一体いつになったら実現するのだろうか……？ そんなことをきっちりと考えていくためにも、あの9・11テロの姿を風化させないことが何よりも大切で、この映画はその一助となるはずだが……。

2006(平成18)年9月16日記